



2020年2月27日発売の講談社
『モーニング』13号に掲載
©「TEZUKA2020」プロジェクト

FRONTIER

教育・研究の最前線

AIを創造的作業に活用するには？

理工学部管理工学科 教授 栗原 聡くりはら さとし

「故手塚治虫をAIでよみがえらせ、そのAI手塚治虫に新しいマンガを作らせる！」

これが、昨年の秋に立ち上がったTEZUKA 2020プロジェクトの当初のスローガンであった。ここ数年のAI技術の発展に伴い、テクノロジーを使つて故人をよみがえらせるといった類いのニュースがたびたび登場するようになったが、TEZUKA 2020はそれらと異なり、「もしも手塚治虫が現在も生きていたら彼が描くであろうマンガを、現在に生きるわれわれとAI技術を駆使して創り上げよう」というのが目的であった。人をはるかにしのぐ大量・高速・正確な情報処理能力を持つコンピュータが、現在の第3次AIブームにおけるAI技術により、見る・聞くなどの認識能力においても人を凌駕する能力を身につけたことで、空港での超高速顔認証システムや生産ラインでの異常検知など、効率化・高速化において絶大な能力を発揮し始めている。しかし効率化には限度があり、残念ながら効率化自体が何か新たなモノを生み出すことはない。生み出す創造的な作業はまだまだ人ならではの仕事なのであ

る。そこで、TEZUKA 2020は人ならではの創造力をさらに引き出し、高め、よりクオリティの高い価値を生み出すためにAIを活用することを目的とした。

新作マンガを制作するには新たなストーリーとキャラクターデザインが必要である。ストーリー生成については、AIにストーリーの種となるプロットを自動生成させたことで、ストーリーを考え出す人の想像力をかなり増強させることができた。そして新しいキャラクターデザインの生成においては、人に対してセレンディビティ^{*}を起させるような多数のデザインを自動生成し提示することで、選択という行為における人の創造力の向上にAIが有効に機能した。

まだまだ荒削りな完成度ではあるが、効率化を目指す現在のAIの活用とは対極的で、人ならではの能力である創造力を拡張するためにAIを活用するという今後のAIの社会浸透を見据えたとき、本来のAIのあるべき立ち位置、すなわち、人と共生し、人の創造力を後押しする役割としてのAIの第一歩となったと考えている。

※思わぬものを偶然に発見する能力